

土佐光武 (上)

松尾芳樹

土佐派絵画資料の中には「土佐家遺印」(旧目録番号440)と呼ばれる印類24種が含まれている。これらは概ね土佐光武と光輝の印類と見なされる。本稿ではこの印影を示すとともに、本資料保管者の立場から提示できるかぎり土佐光武・光輝に関する資料を紹介してみたい。

土佐光武はこの「土佐派絵画資料」を現在に伝えた最大の功労者と呼ぶべき人物である。というのも、幕末明治の混乱期に家業を絶やすことなく、種々の粉本を整理し袋に纏めるなどの作業が光武によってなされたことが、この貴重な資料を散逸させずにすんだ原因となったからである。そのため本資料にはこの光武に直接関わる資料が含まれる他、光武の所蔵を示す印影を捺したのものが見られる。ここに示した光武印についても、あるいは散逸した土佐派関係資料を見つけだす手がかりとなる可能性があると考えられる。

光武は天保15年(1844)3月22日、土佐分家三代にあたる土佐光清の子として京都に生まれた。荒木矩氏の「大日本書畫名家大鑑」に引かれる光武の略伝は、

土佐光武、光清の男、京都住、幼名恒丸、従五位下土佐守、繪所預となる、維新後、京都府畫学校に教鞭を執りしことあり、明治年間、とありあまり多くを語っていない。彼は土佐光貞が宝暦四年(1754)に土佐分家を興して後、光孚、光清に続く四代目にあたる。明治初年土佐家には本家に光文、光章親子がおり、分家に光武がいた。両家は御所の東南角にあたる寺町丸太町にあって、北に本家、南に分家と並び立っていた。この地は近世末期以来、繪所預家土佐の住地である。

京都府画学校の職員履歴書(京都市立芸術大学附属図書館蔵「創立以来舊職員履歴書綴」)の中に土佐光武のものも含まれているので紹介しよう。綴られている履歴書の体裁は画学校開設時の画家については皆統一されており、「内国絵画共進會出品目録」一紙と「履歴書」一紙となっている。この内国絵画共進會とは明治15年(1882)10月に上野で開催された農商務省主催第1回内国絵画共進會のことである。従って資料もこの時期のものと考えら

「土佐家遺印」(旧目錄番号440)印影



土佐
藏書



南極
老人
之壽



藤原
武光
之印



光武
信印



土佐
光武



土佐
光武



光武



藤原
武光



土佐
光輝



光武
之印

側款

「深谷齋修兄

贈以余蒙刻欲

先生即住此石

「應需印

時明治壬寅晚秋

有年加藤鵬

側款

「深谷齋修兄欲

贈石印於先生索

土佐光輝先生索

「余蒙欣然作此

時明治壬寅十一月

有年加藤鵬

側款「風越刻」



光武之印



光武之印



光武之印



光武



光武



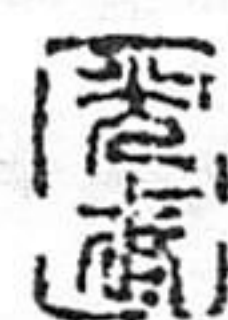
光武



光武



光武



光武



坐翠



華顛人

側款「永年刻」



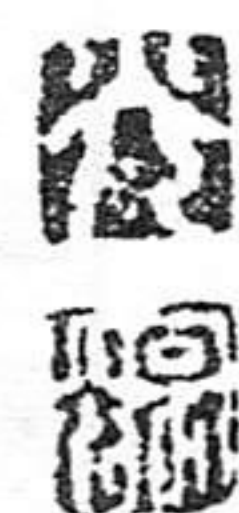
光輝印

「己丑十一月倣漢人刀法有年迂生」

側款



土光佐輝



光輝

れる。

(A)内国絵画共進會出品目録(原本縦書き)

第壹區 累代土佐派 大和繪	京都府山城國上京區第廿五組下御靈前町 土佐光武 ㊦ 天保十五年三月廿二日生			
第壹号	設色密画 紅葉狩ノ図	緋本	幅二尺 長五尺	
第二号	疎画薄彩色 海邊老松旭之図	同	同	

(B)履歴書(原本縦書き)

<p>履歴書</p> <p>京都府山城國上京區第廿五組下御靈前町</p> <p>土佐光武 ㊦</p> <p>天保十五年三月廿二日生</p> <p>一 父画所預從四位下土佐守光清亡</p> <p>一 嘉永七年十月儀叙從六位上任豊前介</p> <p>一 文久元年四月同叙正六位下</p> <p>一 同二年十一月家督相續</p> <p>一 同三年五月光武任土佐介</p> <p>一 明治二年同叙從五位下遷任土佐守</p> <p>一 御一新後被免官位</p> <p>一 明治十三年六月十九日畫学校出仕拜命</p>
--

この履歴書は自筆と思われるので信頼性は高い。従って、荒木氏の略伝の裏付となるとともに、同書に収録される「土佐家系圖」中の光武の略伝

(傳記上編177頁)に見える「従六位上土佐介」の語が改められるべきものであることを教えてくれる。これは川崎千虎氏の紹介した土佐家系圖(國華7号「繪所預家」)の表記をそのまま踏襲したためであろう。

光武は明治13年(1880)に開設された京都府画学校に当初より深く関わっている。学校開設時光武は出仕の身分で勤めた。出仕とは囑託教員というべき立場であるため任期については明確な資料がない。画学校は最初東宗(土佐派圓山派等所謂大和絵ノ派)西宗(野画油絵水画鉛筆画等)南宗(所謂文人画)北宗(雪舟派狩野派等)の四つの教室に分れていた。土佐派の光武は当然、望月玉泉が担当教員であった東宗で教鞭を執ったはずである。この東宗がなくなるのは明治21年(1888)画学校規則が改正され、東西北3宗が一括され東洋画となった時だから、光武が教員の立場を離れたのもこの頃ではなかったろうか。光武と同じく明治13年に出仕を命ぜられた43人の画家達の中でこの時囑託教授や教諭に任命し直された者が多いため、教員の再編成が行われたと考えられるからである。

こうして光武は教員としては学校を離れたわけだが、明治26年(1893)1月に京都市参事会より京都市美術学校商議員を囑託されている。商議員制度は学校の経営基盤を確立するために設立されたもので、富岡鐵齋、岸竹堂、西村總左衛門等画壇や産業界の要人が任じられており、社会と学校を結び付ける役目をしていた。光武の任期は不明で、「土佐派絵画資料」の中にはこの明治26年の辞令(旧目録番号360)しか遺されていない。商議員制度は明治33年(1900)に任期5年(同36年に任期3年に改める)と定められており、同30年代末まで行われていたようである。

先の履歴書のとおり、光武は明治2年(1869)に従五位下まで累進しながら、まもなく「御一新後被免官位」として、官位を免ぜられている。この御一新の語は同年6月の版籍奉還を指すものであろう。こうして官位を失い士族となった土佐家の生計がどのような変動を見せたのか具体的に知るとは難しいのだが、近世では官位によるところが大きかった画料が大きな影響を受けたことは想像に難くない。しかし、明治16年(1883)に宮内省から殿丁を命じられた文書(旧目録番号360)には、殿丁任命に伴い月額五圓が支給される旨書かれている。高給とはいえないまでも定収入があり、画作の依頼もあれば、画学校時代の土佐家は家業を継続する経済基盤についてさほど不安なものがあつたとは思われない。(続く)